

GT サウンド 試聴会報告 (2016.5.6)

GT サウンドが、今回は比較的コンパクトなスピーカーシステム SFS-2B7 (GT アトム) の試聴会を開催するというので行ってきました。

<SFS-2B7 の仕様>

SFS-2B7 (通称 GT アトム) は、ドライバーには GSU-D04、ウーファーには GSU-W16 (40cm)、ネットワークには GT 標準型を搭載したホーン型 2 ウェイシステムで、W480×H1000×D500mm、重さ約 120kg という製品です。

会場には、他社のモデルも比較のために並べられ、ドライバーとウーファーの詳細説明図や IKEDA のカートリッジの展示もありました。



<試聴の経過>

最初に開発の意図やドライバーとウーファースの構造、素材などについて他社製品と比較しつつ詳しい説明がありました。

長い説明の後、やっと試聴に入り、アキュフェーズのプレイヤーで参加者のリクエストで宇野功芳指揮の合唱曲の CD が 3 種類かけられましたが、かけられた順番に透明度が上がり、濁りが少なくなったように感じました。後で聞くと、ナノテックシステムズの NESPA というもので、特殊な光を当てることで金属の薄膜とポリカーボネートとの密着性を高めることで、CD の読み取り精度を高め、音質を向上させるものだそうです。順番は未処理、処理後時間経過したもの、その場で処理したものでした。

次に、これも参加者持参のピアノの CD でしたが、力強いタッチはわかるものの、まるやかすぎるようにも感じました。続いて参加者から低音を確認したいということで、ロックやコントラマリimbaが入った打楽器の曲やサンサーンスのオルガンがかかりましたが、かなりクオリティの高い低音を聴かせるもののオルガンの最低域は、本スピーカーの f_0 が 28Hz であるため、さすがに苦しいところがありました。

ヴァイオリンを聴きたいというリクエストを出して、ムローバのバッハの無伴奏パルティータをかけてもらいましたが、ツイーターがなく、ホーンだけの割には倍音も結構よく伸びている印象でした。

ここでアナログに移り IKEDA SAI でアメリックとキースジャレットを聴かせてもらいましたが、CD よりは音楽の表情が豊かになったものの、なんとなく IKEDA のカートリッジの本来のポテンシャルが出切っていないように感じました。ドライバーを駆動する Lux の 300B アンプの問題ではないかと思当をつけていましたが、この理由は後ほど明らかになりました。

興味深かったのはドライバーを並べて、裸のドライバーの音を聴かせるデモでした。上掲の写真左から、JBL2450、JBL375、TAD、GT サウンドでしたが、GT サウンドがもっともフルレンジに近いような素直な音がしたのに対し、他は癖というか暴れのようなものが感じられました。

最後にカートリッジを IKEDA 9 TP に替えてキースジャレットの続きとアバドの幻想を聴かせてくれましたが、この時、ドライバー用の Lux の 300B アンプを外し、アキュフェーズのプリメインアンプのみで鳴らすようにしたため、本来のドライバーと IKEDA のカートリッジの切れ込みや解像度の良さが味わえるようになりました。

<まとめ>

相変わらず講釈が長くて音楽を聴く時間が短いのが残念でしたし、今回ドライバー用の駆動に Lux の 300B アンプを使ったのが裏目にでて、十分に SFS-2B7 の本来のポテンシャルを確認できませんでした。ドライバーの裸の音の比較は興味深く聴けましたし、最後になって IKEDA のカートリッジの良さも分かりました。

以上